

パネルディスカッション

大学教員の教育能力をどう開発するか

司会：荒木 光彦、藤岡 完治

問題提起

藤 岡 完 治（京都大学高等教育教授システム開発センター教授）

（藤岡） どうぞよろしくお願いします。

今、ご紹介がありましたように、私は大学教育について高所大所から問題提起をする立場にございません。何か先生方の議論の柱になるようなことを提案できればと思っております。

大学教員の教育能力をどう開発するかという今回のテーマを受けて、3つのキーワードをひろってみました。1. 大学の教員であることとは、2. 教育能力をどう考えるか、3. それを開発することが可能なのか（その中身は何か）です。これらのキーワードに応えるかたちで今回のフォーラムを考えようということです。

先程荒木センター長からも話がありましたように、これまで6回積み上げてきわけですが、第1回目が、今日の我が国の大学をどう見るか。第2回目が、大学で育てられる学生像をどう描くか。第3回目が、大学教育の個性化をどう進めるか、大学教育の多様化の中での個性化をどう図るか。第4回が、これからの教養教育をどうするか。第5回が、大学の授業をどう変えるか。第6回目（昨年）は、私も提案させていただいたのですが、FDをどう組織化するかということで、相互研修としての共同体形成をテーマにしたわけですが。このように考えますと、大きな大学像から始まって、学生像、多様化と個性化というようにどんどん対象を絞ってきたわけで、流れからいうと今回は評価ということになります。時節柄大学評価学位授与機構も発足しまして、評価ということがクローズアップされてきています。しかしちょっと待とうと踏みとどまったところです。といいますのは、今日のフォーラムで何を追求するかということの中身になるのですが、大学教育を改善し、新たな大学教育を生み出していくという観点に立ったときに、内在的な視点（内部から改革していく視点）を持つべきではないかと考えたからです。その中心に、大学の教員というのは何をやる人なのかというテーマがくるのではないかと思います。もちろん評価に移ってもいいのですが、評価に焦点をあてますとどうしても外在的な目といいますか、今日やっていることについて外から見る目が入ってきます。ともすると、大学を閉じた系として対象化する危険性があります。そこで内部を見てみよう、内部の充実という観点から考えてみようということで、大学教員の教育能力に目を向けてみたわけですが。

本日のパネルディスカッションの構造は4つのフェーズから考えていこうと思います。あえてフェーズと申し上げたのは、カリキュラム、授業評価、教育開発がPLAN・DO・SEEという目的・合理的なシステム開発の手順になるわけですが、そのように機械的に段階として見ていこうということではなくて、それぞれの先生方がかかわった提案を、4つの側面から強調して提案していただこうということです。大学としての教育計画という視点から安彦先生に、大学教員の教育実践を授業という問題として田中先生に、授業の評価というところから井下先生に、PLAN・DO・SEEに対応する側面をご提案いただき、その中心にいる教師の教育能力をどう開発するかという視点を、阿部先生から出していただけたらと思います。つまりPLAN・DO・SEEの三重の輪と、その三重の輪の交点に大学教員を置いて、今日のパネルディスカッションを展開できればということでございます。

このように設定して、どんなことが議論の焦点に上ってくるかというのは蓋を開けてみなければわかりませんが、次のようなことが問題になるのではないかと思います。

1つは、大学教員をめぐる状況。我々は今どこにいるのかということです。一方で学生の多様化の問題があり、他方でこれからの日本の進路も含めた社会的なニーズの問題があります。それらとの絡みで大学のアカウンタビリティ

(教育責任)ということが言われるわけですが、その中身に何を考えればいいのか。その中で大学教員の教育能力は何なのか。今日の議論の中で大学教員をめぐる状況が浮き彫りになってくると思います。

もう1つは、教育される学生をどう見るかです。これは第2回のフォーラムでもトピックとして取り上げられたことですが、今日の時点に立って学生をどう見るかがそれぞれの先生の提案の背景にも組み込まれると思います。とりわけ今日知の見直し、知の再編ということが言われているわけですが、どういう知を学生に期待するのか、形成するのかという問題。そのときにこれまで知識を伝達し、学生はそれを受容するという枠組みで長く大学はやってきたわけですが、その知を「学生たちの世界に対する態度」というかたちで、とらえなおすことが迫られているのだらうと思います。一人一人の個人の内部においては学ぶことの意義の形成と、知的な自己責任に焦点が当たると思います。とりわけ高度な思考能力(分析、統合、創造性、批判的思考能力等)といった高次の学習に動機づけられることが、教育される学生像の中身になると思います。その中で、学生はこれまでは与えられて学ぶという枠組みでできたとすると、これからは「今考えている私」というものを意識化していく。その意味で自己言及という言葉を使いたいのですが、前提を問いなおしたり批判的に吟味したりしながら、今学んでいる私、考えている私を問いなおすということです。その契機としての省察すること(リフレクション)が鍵になると思っています。同時に大学が職業人としての学生を準備する(プロフェッショナルグロース)という側面は欠かせないわけです。学生の人間的な成長(パーソナルグロース)の問題と職業人としての準備の両方を視野に置きながら、学生の教育が必要になるでしょう。そのように知を中心にしながら、学生が大学でどのように教育されるかということの問題群が、今日の話題の中からクローズアップされるかと思います。

3番目は、大学の教員の教育能力の内容をどう考えるかということです。2で述べたことが話題になると考えると、学生の知の経験を保障する学習過程あるいはカリキュラムを、どのように組み立てるかが、大学教員の教育能力の焦点になるだらうと思うわけです。これが従来の大学教員の教育能力ということから大きく転換を迫られているところではないかということです。つまり、知の活性化に教育的に関与するというのはどういうことなのか。これまでが知識を増やすこととか、知識を普及することが、大学教員の主たる任務としてイメージされていたとすれば、これからは知の解放が問題になって、そこに我々はどうにかかわれるかということになると思います。

中身として何を考えるかを列挙しますと、1. カリキュラムを開発したり組織する能力。その中では大学におけるカリキュラムは何かという問題が話題になるかと思います。2. 学習を指導あるいは支援する能力とは何か。研究を指導、支援する能力とは何か。人間的成長を支援する能力とは何か。これは我が国においては決して意識の中になかったわけではありませんが、学生の人間的成長というのは、周辺に置かれていた。あるいは大学の組織としてカウンセリングセンターや学生相談室の仕事というかたちで置かれて、しかも主としてカウンセリングの話として問題にされてきたわけです。今日さまざまな学生をめぐる問題はこうした機能を分離して外部に置いておくということではすまなくなっている。そうすると、教育能力の内容としても考えざるをえない。それをどう考えていったらいいかということです。3. 学習リソースや環境を開発する能力。この中にはマルチメディア、ウェブ学習社会という問題も含めて、それらを開発したり組織したりする能力が問題になると思います。次に4. ですが今、教育能力というかたちで、一人一人の教師、教員という感じで述べてきましたが、ここでは大学としての教育能力が問題なのではないかという意味で、「大学の教育能力」は何かとしました。個々の教員の教育能力は何だらうか。教員集団としての教育能力は何だらうか。また、教育能力を例えばプレゼンテーションのスキルだとか説明のスキルといった、実体のあるものとして考えて、これを先生方につけてもらえばいいというような問題なのか、あるいは教員集団相互の関係だとか集団の中から生まれだしてくる力として教育能力を考えるべきなのかという、実体が関係かといったような視点も、今日のトピックとして取り上げられればと思っております。大学の教育は文化的な実践なのだと考えると、大学における文化的実践としてのFDの流れということもそこから出てくるのではないかと思います。

さらに、教育能力の開発は我々には耳慣れた表現ではなかったわけです。開発に我々はどういうイメージを付与したらいいかということです。我々は今までは大学教員として採用されると、それで資格があると考えていたわけです。学位を持っている、したがって、大学教員の資格があると考えてきたわけです。大学教員という素質があって、素質のない私のような者が大学教員をやっているかもしれないということもあるわけですから、資格、資質、素質という言葉と、ここでいう能力開発の能力をどう考えればいいのかということの問題にしてみました。

第5は開発とはどういうことかということです。開発することと教員としての成長、教員としての発達ということに関係するのだろうか。まったく別な概念なのか。そこら辺も話題になるといいと思います。では、何を教員の教育能力として開発するのか（開発の内容）。開発の主体はだれなのか（開発の主体）。どう開発していくのかという方法の問題。さらには、結果をどう評価するのかといった評価の問題。こういったさまざまな面から、教育能力の開発に光が当てられればいいのではないかと考えて、予想される焦点として5番の柱を考えました。

このように見てきますと、実は学生というのが大学改革の中で考えられているようで考えられていないと思ったわけです。大学教員の教育能力の開発といったときに、その対局に学生がいるわけですが、学生というのは改革の中で教員によって教育される対象と見られるのか、あるいは大学改革の中で主体として何らかの位置を占めるのか。今の動きの中では学生は教育される対象の方へ、どんどん追いやられているように思うわけです。そのことについてどう考えたらいいか。逆に学生は大学改革や教員の教育能力についてどう見ているのだろうか。学生の側からも我々自身の動きを対象化してみる必要もあるだろう。大学教員の教育能力をどう開発するかというテーマは、大学教育をどう考えるかということにまで広がってしまって、かえって焦点が絞れなくなるのではないかという気もしますが、そういった諸々の問題に焦点を当てながら、この場が全体的に大学教員の教育能力を考える場になればいいかなと思って、前座を務めさせていただいたわけです。

すべての先生がすべてのことに答えていただくわけではないわけですが、それぞれの先生のお立場から提案をいただき、それをもとに議論できればと思っております。どうもありがとうございました（拍手）。

当日配布資料

第7回大学教育改革フォーラム パネルディスカッション

大学教員の教育能力をどう開発するか

【問題提起】

藤 岡 完 治（京都大学高等教育教授システム開発センター）

○パネルディスカッションのキーワード：「大学教員」、「教育能力」、「開発」

I. 我々はどこにいるか

○これまでのフォーラムのテーマ

- ・今日わが国の大学をどう見るか
- ・大学で育てられる学生像をどう描くか
- ・大学教育の多様化と個性化
- ・大学における授業のあり方
- ・FD＝相互研修の共同体の構築

II. 今日のフォーラムで何を追求するか

○大学教育を生成においてとらえる内在的視点の確保＝「大学教員」

- ・評価にいきそうであるが…… ex. 「外部評価」、意識改革（「眠った子」）
- ・外在的な目の導入により、「閉じた系」として大学を対象化する危険性

III. 本日のパネルディスカッションの構造

○大学教員の教育能力を4つのフェーズ（側面）から見ていく。（4つの「段階」ではない）

- ・カリキュラム（plan）…………… 安彦先生
- ・授業（do）…………… 田中先生
- ・評価（とりわけ授業評価）（see）…… 井下先生
- ・教育開発（develop）…………… 阿部先生

IV. 予想されるディスカッションの焦点

1. 大学教員を取り巻く状況

- ・学生の多様化
- ・社会的ニーズ
- ・教育責任（accountability）
- ・教育能力

2. 教育される学生像

- ・「知」をどうみるか
「世界」に対する態度
学ぶことの意味と知的自己責任
- ・高次の学習へと動機づけられる。（分析、統合、創造性、批判的思考能力……）
- ・「自己言及（考えている「私」自身を問う）」と「省察（リフレクション）」

- ・職業人として準備されること（professional growth）と人間的成長（personal growth）

3. 教育能力の内容

- 1.、2. をうけて問題になると思われるが……

○どのような学習過程の成立を目指すか＝大学教員の教育能力の焦点

「知（知ること）」の活性化に教育的に関与するとはどういうことか

知識を開放すること。（cf. 「知識を増やすこと」、「知識を普及すること」）

- ・カリキュラム開発・組織能力

今日における大学のカリキュラムとは何か？

- ・学習指導（支援）能力
- ・研究指導（支援）能力
- ・人間的成長支援能力
- ・学習リソース・環境開発能力（含、multimedia）

……

4. 大学の教育能力とは何か

- ・個々の教員の教育能力
- ・教員集団としての教育能力
- ・教育能力を「実体」としてとらえるか「関係」「生成」としてとらえるか
- ・文化的実践としての大学教育→FD

5. 教育能力の開発とはどういうことか

- ・「資格」、「資質」、「素質」と「能力」の関係
- ・「開発」とはどういうことか
- ・「開発」は「成長」、「発達」とどう関係するのか
- ・何を「開発」するか（＝内容）
- ・「開発」の主体は誰か（＝主体）
- ・どう「開発」するか（＝方法）
- ・結果をどう評価するのか（＝評価）

V. 忘れられた環＝学生

○大学教員の教育能力の対極としての学生

- ・大学教育改革において「学生」はどのようにとらえられているのか
- ・学生は大学改革と、教員の教育能力についてどう見ているのか